

蓬生 渋谷栄一訳

第一章 末摘花の物語 光る源氏の須磨明石離京時代

「第一段 末摘花の孤独」

須磨の浦で涙に暮れながら過ごしていらつしやうたところ、都でも、あれこれとお嘆きになっていらつしやる方々が多かつたが、そうはいつても、ご自身の生活のよりどころのある方は、ただお一方をお慕いする思いだけは辛そつであつたが、二条の上なども、平穩なお暮らして、旅のお暮らしをご心配申し、お手紙をやりとりなさつては、位をお退きになつてからの仮りのご装束をも、この世の辛い生活をも、季節ごとにご調進申し上げなされることによつて、心を慰めなかつたであろうが、かえつて、その妻妾の一人として世の人にも認められず、ご離京なさつた時のご様子にも、他人事のように聞いて思ひやつた人々で、内心をお痛めになつた人も多かつた。

常陸宮の姫君は、父の親王がお亡くなりになつてから、他には誰もお世話する人もないお身の上で、ひどく心細い有様であつたが、思ひがけないお通ひが始まつて、お氣をつけてくださることは絶えなかつたが、大変なご威勢には、大したこともない、お情け程度とお思ひであつたが、それを待ち受けていらつしやる貧しい生活には、大空の星の光を盥の水に映したような氣持ちがして、お過ごしになつていたところ、あのような世の中の騒動が起こつて、おしなべて世の中が嫌なことに思ひ悩まれた折に、格別に深い関係でない方への愛情は、何となく忘れたようになって、遠く旅立ちなかつた後は、わざわざお訪ね申し上げることもおできになれない。かつてのご庇護のお蔭で、しばらくの間は、泣きながらもお過ごしになつてい

らつしやうたが、歳月が過ぎるにしたがつて、実にお寂しいご様子である。昔からの女房などは、

「いやはや、まうたく情けないご運であつた。思ひがけない神仏がご出現なさつたようであつたお心寄せを受けて、このような頼りになることも出ていらつしやるのだと、ありがたく拝見しておりましたが、世間一般のこととはいいながらも、また他には誰をも頼りにできないお身の上は、悲しいことです」

と、ぶつぶつ言つて嘆く。あのような生活に馴れていた昔の長い年月は、何とも言いようもない寂しさに目なれてお過ごしになつていたが、なまじつか少し世間並みの生活になつた年月を送つたばかりに、かえつてとても堪え難く嘆くのであろう。少しでも、女房としてふさわしい者たちは、自然と参集して来たが、みな次々と後を追つて離散して行つてしまつた。女房たちの中には亡くなつた者もいて、月日の過ぎるにしたがつて、上下の女房の数が少なくなつて行く。

「第二段 常陸宮邸の窮乏」

もともと荒れていた宮の邸の中、ますます狐の棲みかとなつて、氣味悪く、人氣のない木立に、鼻の声を毎日耳にして、人氣のあるによつて、そのような物どもも阻まれて姿を隠していたが、木霊などの怪異の物どもが我がもの顔になつて、だんだんと姿を現し、何ともやりきれないことばかりが数知らず増えて行くので、たまたま残つていてお仕えしている女房は、やはり、まこと困つたことです。最近の受領どもで、風流な家造りを好む者が、この宮の木立に心をかけて、お手放しにならないかと、伝を求めて、ご意向を伺わせていますが、そのようにあそばして、とてもこう、恐ろしくないお住まいに、ご転居をお考えになつてください。今も残つて仕えている者も、とても我慢できません」

などと申し上げるが、

「まあ、とんでもありません。世間の外聞もあります。生きているうちに、そのようなお形見を何もかも無くしてしまふなんて、どうしてできましよう。このように恐ろしそつにすつかり荒れてしまつたが、親の面影がとどまつ

ている心地がする懐かしい住まいだと思つから、慰められるのです」
と、泣く泣くおつしやつて、お考えにも入れない。

お道具類も、たいそう古風で使い馴れているのが、昔風で立派なのを、なまはんかに由緒を尋ねようとするとする者、そのような物を欲しがつて、特別にあの人この人にお作らせになつたのだと聞き出して、お伺いを立てるのも、自然とこのような貧しいあたりと侮つて言つて来るのを、いつもの女房、しかたがございませぬ。そうすることが世間一般のこと」

と思つて、目立たぬように取り計らつて、眼前の今日明日の生活の不由を繕つ時もあるのを、きつくお叱りになつて、

「わたしのためにとお考えになつて、お作らせになつたのでしよう。どうして、賤しい人の家の飾り物にさせましようか。亡きお父上のご遺志に背くのが、たまりませぬ」

とおつしやつて、そのようなことはおさせにならない。

「第三段 常陸宮邸の荒廢」

ちよつとした用件でも、お訪ね申す人はないお身の上である。ただ、ご兄弟の禅師の君だけが、たまに京にお出になる時には、お立ち寄りになるが、その方も、世にもまれな古風な方で、同じ法師という中でも、処世の道を知らない、この世離れした僧でいらつしやつて、生い茂つた草、蓬をさえ、かき払うものともお考えつきにならない。

このような状態で、浅茅は庭の表面も見えず、生い茂つた蓬生は軒と争つて成長している。葎は西と東の御門を鎖し固めているのは心強いが、崩れかかつた周囲の土築を馬、牛などが踏みならした道にして、春夏ともなると、放ち飼ひする子ども料簡も、けしからぬことである。

八月、野分の激しかった年、渡廊類が倒れふし、幾棟もの下屋の、粗末な板葺きであつたのなどは、骨組みだけがわずかに残つて、居残る下衆さえいない。炊事の煙も上らなくなつて、お気の毒なことが多かつた。

盗人などという情け容赦のない連中も、想像するだけで貧乏と思つてか、この邸を無用のものを通り過ぎて、寄りつきもしなかつたので、このようにひどい野原、藪原であるが、それでも寢殿の中だけは、昔の装飾と変わ

らないが、びかびかに掃いたり拭いたりする人もいない。塵は積もつても、れつきとした莊嚴なお住まいで、お過ごしになつてゐる。

「第四段 末摘花の気紛らし」

たわいもない古歌、物語などみたいな物を慰み事にして、無聊を紛らわし、このような生活でも慰める方法なのであるが、そのような方面にも関心が鈍くいらつしやる。特に風流ぶらずとも、自然と急ぐ用事も無い時には、気の合う者どうして手紙の書き交わしなど気軽にし合つて、若い人は木や草につけて心をお慰めになるはずのだが、父宮が大事にお育てになつたお考えどおりに、世間を用心すべきものとお思いになつて、たまには文通なさつてもよさそうな関係の家にも、まつたくお親しみにならず、古くなつた御厨子を開けて、『唐守』『藐姑射の刀自』『かぐや姫の物語』などの絵に描いてあるのを、時々のもて遊び物にしていらつしやる。

古歌といつても、優雅な趣向で選び出して、題詞や読人をはつきりさせて鑑賞するのは見所もあるが、きちんとした紙屋紙、陸奥紙などの厚ぼつたいのに、古歌のありふれた歌が書かれているのなどは、実に興醒めな感じがするが、つとめて物思いに耽りなされるような時々には、お広げになつている。今の時代の人が好んでするよつな、読経をちよつとしたり、勤行などということとは、とてもきまり悪いものとお考えになつて、拝見する人もいないのだが、数珠などをお取り寄せにならない。このように万事きちんとしていらつしやるのであつた。

「第五段 乳母子の侍従と叔母」

侍従などと言つた御乳母子だけが、長年お暇も取らうともしない者としてお仕えしていたが、お出入りしていた齋院がお亡くなりなつたりなどして、まことに生活が苦しく心細い気がしていたところ、この姫君の母北の方の姉妹で、落ちぶれて受領の北の方におなりになつていた人がいた。

娘たちを大切にしていゝ、見苦しくない若い女房たちも、全然知らない

家よりは、親たちが出入りしていた所を」と思つて、時々出入りしている。この姫君は、このように人見知りするご性格なので、親しくお付き合いなさらない。

「わたしを軽蔑なさつて、不名誉にお思ひであつたから、姫君のご生活が困窮しているようなのも、お見舞い申し上げられないのです」

などと、ご憎らしい言葉を言つて聞かせては、時々手紙を差し上げた。

もともと生まれついたそのような並みの人は、かえつて高貴な人の真似をすることに神経をつかつて、お高くとまつている人も多くいるが、高貴なお血筋ながらも、こつまで落ちぶれる運命だつたからであろうか、心が少し卑しい叔母だつたのであつた。

「わたしがこのように落ちぶれたさまを、軽蔑されていたのだから、何とかして、このような宮家の衰退した折に、この姫君を、自分の娘たちの召し使いにしたいものだ。考え方の古風なところがあるが、それはいかにも安心できる世話役といえよう」と思つて、

「時々こちらにお出あそばして。お琴の音を聴きたがつている人がおります」と申し上げた。この侍従も、いつもお勧めするが、人に張り合う気持ちからではないが、ただ大変なお引つ込み思案なので、そのように親しくなさらないのを、憎らしく思つたのであつた。

こつしているうちに、あの叔母の夫が、大宰大式になつた。娘たちをしかるべく縁づけて、筑紫に下向しようとする。この姫君を、なおも誘おうという執念が深く、

「遙か遠方に、このように赴任することになりましたが、心細いご様子が、つねにお見舞い申し上げていたわけではありませんでしたが、近くにいらつたという安心感があつた間はともかく、とても気の毒で心配でなりません」

などと、言葉巧みに言うが、まつたくご承知なさらないので、

「まあ、憎らしい。ご大層なこと。自分一人お高くとまつていても、あのよくな数原に過ごしていらつしやる人を、大將殿も、大事にお思ひ申し上げないでしょう」

などと、恨んだり呪つたりしているのであつた。

「第一段 顧みられない末摘花」

そうこつしているうちに、はたして天下に赦免されなかつて、都にお帰りになるといふので、世の中の慶事として大騒ぎする。自分も何とか、人より先に、深い誠意をご理解いただこうとばかりに、競い合つている男、女につけても、自分の貴い人も賤しい人も、人の心の動きを御覧になるにつけ、しみじみと考えさせられること、さまざまである。このように、あわただしいうちに、まつたくお思ひ出しになる様子もなく月日が過ぎた。

「今はもうお終いだ。長い年月、ご不運な生活を、悲しくお気の毒なことと思ひながらも、万物の蘇る春にめぐりあつていただきたいと願つていたが、とるにたらない下賤な者まで喜んでいふという、ご昇進などするのを、他人事として聞かねばならないのだつた。悲しかつた時の嘆かしさは、ただ自分ひとりのために起こつたのだと思つたが、嘆いても甲斐のない仲だわ」とがっかりして、辛く悲しいので、人知れず声を立ててお泣きになるばかりである。

大式の北の方、

「それ見たことか。いつたい、このように不如意で、体裁の悪い人のご様子を、一人前にお扱いになる方がありませんか。仏、聖も、罪の軽い人をよくお導きもなさるといふものだが、このようなご様子で、偉そうに世間を見下しなかつて、宮、上などが生きていらした時のままと同じようであらうしやる、ご高慢が、不憫なこと」

と、ますます馬鹿らしく思つて、

「やはり、ご決心なさい。何かとうまく行かない時は、何も見なくてすむ山奥へ入りこむというものですよ。地方などは、むさ苦しい所とお思ひでしょうが、むやみに体裁の悪いもてなしは、けつして、致しません」

などと、とても言葉巧みに言うと、すっかり元気をなくしている女房たちは、

「そのようにご承知なさつてほしい。たいしたことなさそうなお身の上を、どうお考えになつて、このように意地をお張りになるのだらう」

と、ぶつぶつと非難する。

侍従も、あの大式の甥に当たる人に、契りを結んで、残して行くはずもなかつたので、不本意ながら出発することになって、

「お残し申したままで出立するのが、とても心残りです」

と言つて、お誘い申し上げるが、やはり、このように離れてしばらくになつてしまつた方に期待をかけなさつてゐる。お心の中では、いくら何でも、時のたつうちには、お思い出しくださる機会のないことがあるうか。しみじみと深いお約束をなさつたのだから、わが身の上はつらくて、このように忘れられてゐるようであるが、風の便りにでも、わたしのこのようにひどい暮らしをお耳になさつたら、きつとお訪ねになつてくださるにちがいない」と、長年お思ひになつていたので、おおよそのお住まいも以前より実に荒廢してひどいが、ご自分のお考えで、ちよつとした御調度類なども失くさないようにさせなさつて、辛抱強く同じように堪え忍んでお過ごしになつてゐるのであつた。

声を立てて泣き暮らしながら、ますます悲嘆に暮れていらつしやるのは、まるで山人が赤い木の実一つを顔から放さないようにお見えになる、その横顔などは、普通の男性ではとても堪えて拝見できないご容貌である。詳しくお話し申し上げられない。お気の毒で、あまりに口が悪いようであるから。

「第二段 法華御八講」

冬になつてゆくにつれて、ますます、すがりつくべきでだてもなく、悲しそつに物思ひに沈んでお過ごしになる。あの殿におかれては、故院の御追善の御八講を、世間でも大騒ぎとなつて盛大に催しなされる。特に僧侶などは、普通の僧はお召しにならず、学問の優れ修行を積んだ、高德の僧だけをお選びあそばしたので、この禅師の君も参上なさつてゐた。

帰りがけにお立ち寄りになつて、

「これこれでした。権大納言殿の御八講に参上しておつたのです。たいそう立派で、この世の極楽浄土の装飾に負けず、莊嚴で興趣のぜいをお尽くしになつてゐた。仏か菩薩の化身でいらつしやるのだらう。五濁に深く染まつてゐるこの世に、どうしてお生まれになつたのだらう」

と言つて、そのまますぐにお帰りになつてしまつた。

言葉少なで、世間の人と違つた「兄妹どうしてあつて、ちよつとした世間話でさえお交わしなされない」。それにしても、このように不甲斐ない身の上を、悲しく不安なままに放つてお過ごしになるとは、辛い仏菩薩様だわ」と、辛く思われるが、いかにも、これきりの縁なのだらう」と、だんだんお考えになつてゐるところに、大哉の北の方が、急に來た。

「第三段 叔母、末摘花を誘つ」

いつもはそんなに親しくしないのに、お誘い申そうとの考えで、お召しになるご装束など準備して、よい車に乗つて、顔つき、態度も、得意に物思ひのない様子で、予告もなくやつて來て、門を開けさせるや、見苦しく寂しい様子、この上もない。左右の戸もみな傾き倒れてしまつていたので、男どもが手助けして、あれこれと大騒ぎして開ける。どれがそれか、この寂しい宿にも必ず踏み分けた跡があるという三つの道はと、探し当てて行く。かろつじて南面の格子を上げてゐる一間に車を寄せたので、ますますどうしてよいか分からなくお思ひになつたが、あきれるくらい煤けた几帳を差し出して、侍従が出て來た。容貌など、衰えてしまつてゐた。長年のうちひどくやせ細つてゐるが、やはりどこことなく品のある感じで、恐れ多いことであるが、姫君と取り替えたいくらいに見える。

「旅立とつと思ひながらも、お気の毒な様子がお見捨て申し上げにくくて侍従の迎えに参上しました。お嫌ひになりよそよそしくして、ご自身ではちよつとでもお越しあそばされませんが、せめてこの人だけはお許しいただきたく思ひまして。どうしてこのような寂しいさまで」

と言つて、つい泣き出してしまふはずのところだ。けれども旅先に思いを馳せて、とても気分よさそうである。

「故宮がご存命でいらした時、わたしを不名誉な者とお思ひ捨てになつていらしたので、疎遠なようになつてしまいましたが、今までも、どうしてそう思つたでしょうか。高貴なお身の上に氣位が高くお持ちになり、大將殿などがお通いになるご運勢のほどを、もつたいなくも存ぜずにはいられませんので、親しく交際させていただきますのも、遠慮いたすこと

が多くて、ご無沙汰いたしておりましたが、世の中がこのように定めのないものなので、人数にも入らない身の上は、かえって気安いものでございまして。及びもつかなく拝見いたしましたご様子が、実に悲しく気の毒なのを、近くにいますうちは御無沙汰いたしていた折も、そのうちにと呑気に思っておりますが、このように遙か遠くに下つてしまふことになると、気がかりで悲しく存じられます」

などと話を持ち掛けるが、心を許してお返事もなさらない。

「とても嬉しいことですが、世間離れたわたしなどには、どうして一緒に行けましようか。こうしたまま朽ち果てようと思つて存じております」

とだけおっしゃるので、

「なるほど、そのようにお思いになるのもごもつともですが、せつかく生きている身をだいなしにして、このように気味の悪い所に暮らしている例はございませぬでしょう。大將殿がお手入れしてくだされば、うつて変わつて元の美しい御殿にもなり変わるうと、頼もしいございませぬが、ただ今のところは、式部卿宮の姫君より他には、心をお分けになる方もないということとです。昔から浮気なお心で、かりそめにお通いになつた人々は、みなすつかりお心が離れておしまいになつたということとです。ましてや、このようにみすばらしい様子で、藪原にお過ごしになつていらつしやる人を、貞淑に自分を頼つていらつしやる様子だと、お訪ね申されることは、とても難しいこととです」

などと説得するが、本当にそのとおりだと思ひになるのも、実に悲しくて、しみじみとお泣きになる。

「第四段 侍従、叔母に従つて離京」

けれども、動きそつにもないので、一日中いろいろと説得したものの困りはてて、

「それでは、侍従だけでも」

と、日が暮れるままに急ぎ立てるので、気がせいて、泣く泣く、

「それでは、ともかく今日のところは、このようにお勧めになるお見送りだけでも参りましよう。あのよつに申されることもごもつともなこととです。ま

た一方、お迷いになることもごもつともなこととですので、間に立つて拝見するのも辛くて」

と、小声で申し上げる。

この人までが自分を見捨てて行つてしまおうとするのが、恨めしくも悲しくもお思いになるが、引き止めるすべもないので、ますます声を立てて泣くことばかりでいらつしやる。

形見にお与えになるべき着用の衣も垢じみているので、長年の奉公に報いるべき物がなくて、ご自分のお髪のお抜け落ちたのを集めて、鬘になさつていたのが、九尺余りの長さで、たいそうみごとなのを、風流な箱に入れて、昔の薫衣香のたいそう香ばしいのを、一壺添えてお与えになる。

「あなたを絶えるはずのない間柄だと信頼していましたが、思ひのほかに遠くへ行つてしまふのですね、亡くなつた乳母が、遺言なさつたこともありましたが、不甲斐ない我が身であつても、最後までお世話してくれるものと思つていましたのに。見捨てられるのももつともなこととですが、この後誰に世話を頼むのかと、恨めしくて」

と言つて、ひどくお泣きになる。この人も、何も申し上げることができない。

「乳母の遺言は、もとより申し上げるまでもなく、長年の堪えがたい生活を堪えて参りましたのに、このように思いがけない旅路に誘われて、遙か遠くに彷徨い行くことになるとは」と言つて、

「お別れしましてもお見捨て申しません、行く道々の道祖神にかたくお誓ひしましよ、寿命だけは分りませんが」

などと言つて、

「どこにいますか。暗くなつてしまいます」

と、ぶつぶつ言われて、心も上の空のまま引き出したので、振り返りばかりせずにはいられないのであつた。

長年辛い思いをしながらも、お側を離れなかつた人が、このように離れて行つてしまったことを、たいそう心細くお思いになると、世間では役に立ちそうにもない老女房までが、

「いやはや、無理もないこととです。どうしてお残りになることがありましようか。わたしたちも、とても我慢できそつにありませんわ」

と、それぞれに関係ある縁故を思い出して、残っていられないと思つているのを、体裁の悪いことだと聞いていらつしやる。

「第五段 常陸宮邸の寂寥」

霜月ころになると、雪、霰の降る日が多くなって、他では消える間もあるが、朝日、夕日をさえぎる雑草や葎の蔭に深く積もつて、越の白山が思いやられる雪の中で、出入りする下人さえもいなくて、所在なく物思いに沈んでいらつしやる。とりとめもないお話を申し上げてお慰めし、泣いたり笑つたりしながらお気を紛らした人さえいなくなつて、夜も塵の積つた御帳台の中も、寄り添う人もなく、何となく悲しく思わずにはいらつしやれない。

あちらの殿では、久々に再会した方に、ますます夢中なご様子で、たいして重要にお思いでない方々には、特別ご訪問もおできになれない。まして、あの人はまだ生きていらつしやるだろうか」という程度にお思い出しになる時もあるが、お訪ねになろうとつうお気持ちも急に起こらずにいるうちに、年も変わった。

第三章 末摘花の物語 久しぶりの再会の物語

「第一段 花散里訪問途上」

卯月ころに、花散里をお思い出し申されて、こつそりと対の上にお暇乞い申し上げてお出かけになる。数日来降り続いていた雨の名残、まだ少しばらついて、風情ある折に、月が差し出ていた。昔のお忍び歩きが自然と思ひ出されて、優艶な感じの夕月夜に、途上、あれこれの事柄が思ひ出されていらつしやるうちに、見るかたもなく荒れた邸で、木立が鬱蒼とした森のような所をお通り過ぎになる。

大きな松の木に藤が咲きかかつて、月の光に揺れているのが、風に乗つてさつと匂うのが慕わしく、どれがそれからもない香りである。橘のと

は違つて風趣があるので、のり出して御覧になると、柳もたいそう長く垂れて、築地も邪魔しないから、乱れ臥していた。

「かつて見た感じのする木立だなあ」とお思いになると、それもそのはず、この宮邸なのであつた。ひどく胸を打たれて、お車を止めさせなざる。例によつて、惟光はこのようなお忍び歩きに外れることはないのので、お供していたのであつた。お召しになつて、

「ここは常陸宮であつたな」

「さようでございます」

と申し上げる。

「ここにいた人は、今も物思いに沈んでいるのだろうか。お見舞いすべきであるが、わざわざ訪ねるのも大げさである。このような機会に、入つて便りしてみよ。よく調べてから、言い出しなさい。人違ひをしては馬鹿らしいから」

とおつしやる。

こちらでは、ひとしお物思ひのまさるころで、つくづく物思ひに沈んでいらつしやる。昼寝の夢に故宮がお見えになつたので、目が覚めて、実に名残が悲しくお思いになつて、雨漏りがして濡れている廂の端の方を拭かせて、あちらこちらの御座所を取り繕わせてなどしながら、いつになく人並みになられて、

「亡き父上を恋ひ慕つて泣く涙で袂の乾く間もないのに 荒れた軒の雨水ま
でが降りかかる」

というのも、お気の毒なことであつた。

「第二段 惟光、邸内を探る」

惟光が邸の中に入って、あちこちと人の音のする方はどこかと探すが、すこしも人影が見えない。やはりそうだ、今までに行き帰りに覗いたことがあるが、人は住んでいないのだ」と思つて、戻つて参る時に、月が明るく照らし出したので、見ると、格子が二間ほど上がつていて、簾の動く気配である。やつと見つけた感じ、恐ろしくさえ思われるが、近寄つて、訪問の合図をみると、ひどく老いぼれた声で、まずは咳払いしてから、

「そこにいる人は誰ですか。どのような方ですか」

と聞く。名乗りをして、

「侍従の君と申した方に、面会させていただきたい」

と言つ。

「その人は、他へ行つておられます。けれども、同じように考えてくださつてよい女房はおります」

と言つ声は、ひどく年とつてゐるが、聞いたことのある老人だと聞きつけた。

室内では、思いも寄らない、狩衣姿の男性が、ひっそりと振る舞い、物腰も柔らかなので、見馴れなくなつてしまつた目には、もしや、狐などの変化のものではないかと思われるが、近く寄つて、

「はつきりと、お話を承りたい。昔と変わらないお暮らしならば、お訪ね申し上げなされるべきお気持ちも、今も変わらぬにおありのようです。今宵も素通りしがたくて、お止まりあそばしたのだが、どのようにお返事申し上げます。どうぞご安心を」

と言つと、女房たちは笑つて、

「お変わりあそばす御身の上ならば、このような浅茅が原をお移りにならぬにおりましようか。ただご推察申されてお伝えください。年老いた女房にとつても、またとあるまいと思われるほどの、珍しい身の上を拝見しながら過ごしてまいつたのです」

と、ぼつりぼつりと話し出して、問はず語りもし出しそうなのが、厄介なので、

「よいよい、分かつた。まずは、そのように、申し上げましよう」と言つて帰参した。

「第三段 源氏、邸内に入る」

「どうしてひどく長くかつたのだ。どうであつたか。昔の面影も見えないほど雑草の茂つてゐることよ」

とおつしやる。

「これこれの次第で、ようやく分かりました。侍従の叔母で少将と言いまし

た老女が、昔と変わらない様子でありました」

と、その様子を申し上げる。ひどく不憫な気持ちになつて、

「このよつな蓬生の茂つた中に、どのようなお気持ちでお過ごしになつていられたのだらう。今までお訪ねしなかつたとは」

と、ご自分の薄情さを思はずにはいらつしやれない。

「どうしたらよいものだらう。このよつな忍び歩きも難しいであらうから、このような機会でなかつたら、立ち寄ることもできない。昔と変わつていない様子ならば、なるほどそのよつであらうと、推量されるお人柄である」

とはおつしやるものの、すぐにお入りになること、やはり躊躇される。趣き深いご消息も差し上げたくお思いになるが、かつてご経験された返歌の遅いのも、まだ変わつていなかつたなら、お使いの者が待ちあぐねるのも気の毒で、お止めになつた。惟光も、

「とてもお踏み分けになれそうにない、ひどい蓬生の露けさでございます。露を少し払わせて、お入りあそばすよう」

と申し上げるので、

「誰も訪ねませんがわたしこそは訪問しましょう。道もないくらい深く茂つた蓬の宿の姫君の変わらないお心を」

と独り言をいつて、やはりお車からお下りになると、御前の露を、馬の鞭で払いながらお入れ申し上げます。

雨の雫も、やはり秋の時雨のように降りかかるので、

「お傘がございます。なるほど、木の下露は雨にまかつて」

と申し上げる。御指貫の裾は、ひどく濡れてしまつたようである。昔でさえあるかないかであつた中門など、昔以上に跡形もなくなつて、お入りになるにつけても、何の役に立たないのであるが、その場において見ている人がないのも気楽であつた。

「第四段 末摘花と再会」

姫君は、いくら何でもお待ち暮らしになつていた期待どおりで、嬉しけれど、とても恥ずかしいご様子で面会するのも、たいそうきまり悪くお思ひであつた。大貳の北の方が差し上げておいたお召し物類も、不愉快

にお思いであった人からの物ゆえに、見向きもなさらなかったが、この女房たちが、香の唐櫃に入れておいたのが、とても懐かしい香りが付いているのを差し上げたので、どうにも仕方がなく、お着替えになつて、あの煤けた御几帳を引き寄せてお座りになる。

お入りになつて、

「長年のご無沙汰にも、心だけは変わらずに、お思い申し上げていましたが、何ともおつしやつてこないのが恨めしくて、今まで様子をお伺い申し上げておりましたが、あのしるしの杉ではないが、その木立がはつきりと目につきましたので、通り過ぎることもできず、根くらべにお負け致しました」とおつしやつて、帷子を少しかきやりなさると、例によつて、たいそうきまり悪そうにすぐにも、お返事申し上げなさらぬ。こうまでして草深い中をお訪ねになつたお心の浅くないことに、勇気を奮い起こして、かすかにお返事申し上げるのであつた。

「このような草深い中にひっそりとお過ごしになつていらした年月のおいたわしさも、一通りではございませんが、また昔と心変わりしない性癖なので、あなたのお心中も知らないままに、分け入つて参りました露けさなどを、どのようにお思いでしょうか。長年のご無沙汰は、それはまた、どなたからもお許しいただけることでしよう。今から後のお心に適わないようなことがあつたら、言つたことに違ふという罪も負いましょう」

などと、それほどにもお思いにならないことでも、深く愛しているふうにお泊まりになるのも、あたりの様子をはじめとして、目を背けたいご様子なので、体よく言い逃れなさつて、お帰りにならうとする。ひき植えた松ではないが、松の木が高くなつた長い歳月の程がしみじみと、夢のようであつたお身の上の様子も自然とお思い続けられる。

「松にかかつた藤の花を見過ごしがたく思つたのは、その松がわたしを待つというあなたの家の目じるしであつたのですね、数えてみると、すっかり月日が積もつてしまつたよつたね。都で変わったことが多かつたのも、あれこれと胸が痛みます。そのうち、のんびりと田舎に離別して下つたという苦労話もすべて申し上げましょう。長年過ごして来られた折節のお暮らしの辛かつたことなども、わたし以外の誰に訴えることがおできになれよう

かと、衷心より思われぬのも、一方では、不思議なくらいに思われます」

などとお申し上げになると、

「長年待つていた甲斐のなかつたわたしの宿を、あなたはただ藤の花を御覧になるついでにお立ち寄りになつただけなのです」

とひっそりと身動きなさつた気配も、袖の香りも、昔よりは成長なされたか」とお思いになる。

月は入り方になつて、西の妻戸の開いている所から、さえぎるはずの渡殿のような建物もなく、軒先も残つていないので、たいそう明るく差し込んでいるため、ここかしこが見えるが、昔と変わらないお道具類の様子などが、忍ぶ草に荒れているというよりも、雅やかに見えるので、昔物語に塔を壊したという人があつたのを考え併せになると、それと同じような状態で歳月を経て来たことも胸を打たれる。ひたすら遠慮している態度が、そうはいつても上品なもの、奥ゆかしく思わずにはいらつしやれなくて、それを取柄と思つて忘れまいと気の毒に思つていたが、ここ数年のさまざまな悩み事に、うっかり疎遠になつてしまつた間、さぞ薄情者だと思わずにはいられなかつただろうと、不憫にお思いになる。

あの花散里も、人目に立つ当世風などはなやかにさらぬ所なので、比較しても大差はないので、欠点も多く隠れるのであつた。

第四章 末摘花の物語 その後の物語

「第一段 末摘花への生活援助」

賀茂祭、御禊などのころ、ご準備などにかこつけて、人々が献上した物がいろいろと多くあつたので、しかるべき夫人方にお心づけなさる。中でもこの宮には細々とお心をかけなさつて、親しい人々にご命令をお下しになつて、下へ連中などを遣わして、雑草を払わせ、周囲が見苦しいので、板垣というもので、しっかりと修繕させなさる。このようにお訪ねになつたと、噂するにつけても、ご自分にとつて不名誉なので、お渡りになることはない。お手紙をたいそう情愛こまやかに認めになつて、二条院近くの

所をご建築なさっているのです。

「そこにお移し申し上げましょう。適当な童女など、お探しになって仕えさせなさい」

などと、女房たちのことまでお気を配りになって、お世話申し上げなさるので、このようにみずばらしい蓬生の宿では、身の置きどころのないままで、女房たちも空を仰いで、そちらの方角を向いてお礼申し上げるのであった。かりそめのお戯れにしても、ありふれた普通の女性には、目を止めたり聞き耳を立てたりはなさらず、世間で少しでもこの人はと噂されたり、心に止まる点のある女性をお求めなさるものと、皆思っていたが、このように予想を裏切つて、どのような点においても人並みでない方を、ひとかどの人物としてお扱いなさるのには、どのようなお心からであつたのであろうか。これも前世からのお約束なのであろうよ。

「第二段 常陸宮邸に活気戻る」

もうこれまでだと、馬鹿にしきつて、それぞれさまよい離散して行つた上下の女房たち、我も我もお仕えし直そうと、争つて願ひ出て来る者もいる。氣立てなど、それはそれは、引つ込み思案なまでによくいらつしやるご様子ゆえに、気楽な宮仕えに慣れて、これといったところのないつまらない受領などのような家にいる女房は、今までに経験したこともないきまりの悪い思いをするのもいて、げんきんな心をあけすけにして帰つて参り、源氏の君は、以前にも勝るご権勢となつて、何かにつけて物事の思いやりもさらにお加わりになつたので、細々と指図して置かれているので、明るく活気づいて、宮邸の中がだんだんと人の姿も多くなり、木や草の葉もただすさまじくいたわしく見えたのを、遣水を掃除し、前裁の根元をさつぱりなどさせて、大して目をかけていただけに下家司で、格別にお仕えしたいと思う者は、このようにご寵愛になるらしいと見てとつて、ご機嫌を伺いながら、追従してお仕え申し上げている。

「第三段 末摘花のその後」

二年ほどこの古いお邸に寂しくお過ごしになつて、東の院という所に、後はお移し申し上げたのであつた。お逢いになることなどは、とても難しいことであるが、近い敷地内なので、普通にお渡りになつた時、お立ち寄りなどなさつては、そう軽々しくお扱い申し上げなさらない。

あの大貳の北の方が、上京して来て驚いた様子や、侍従が、嬉しく思う一方で、もう少しお待ち申さなかつた思慮の浅さを、恥ずかしく思つていたところなどを、もう少し問はず語りもしたいが、ひどく頭が痛く、厄介で、億劫に思われるので。今後また機会のある折に思い出してお話し申し上げよう、ということである。

